

動脈硬化に対する可視総合光線療法

一般財団法人光線研究所

研究員 佐藤 仁

所長 医学博士 黒田 一明

日本における三大疾病は、ガン(悪性新生物)・急性心筋梗塞・脳卒中です。そのうち、急性心筋梗塞と脳卒中の主な原因は、動脈硬化で血管の病気ともいえます。動脈硬化は加齢現象もありますが、生活習慣の改善で進行を抑制することができますし、また光線療法が大変役立ちます。今回は、動脈硬化に対する可視総合光線療法を解説します。

■動脈硬化

私たちの体は、心臓の働きで『動脈』を通じて、酸素や栄養素を全身の組織や臓器に運び、『静脈』を通じて二酸化炭素や老廃物を回収します。血管の硬化は、動脈でも静脈でも起こりますが、動脈はその重要な役目から、障害が起こると体へのダメージが大きくなります。動脈の硬化は動脈が弾力性を失い硬くなったり、動脈内側の壁が肥厚して狭くなり、進行すると血液がスムーズに流れなくなったり、血流が止まったりして、様々な障害が起こってきます。動脈硬化で起こる主な病気は、下表のとおりです。

【表】動脈硬化で起こる主な病気

部 位	病 名
脳	脳梗塞・脳出血・くも膜下出血
目	眼底出血
頸	頸動脈硬化症
心 臓	心筋梗塞・狭心症
胸部・腹部	大動脈瘤・大動脈解離・破裂
腎 臓	腎硬化症・腎不全・腎性高血圧
脚	閉塞性動脈硬化症

■動脈硬化の原因

動脈が硬くなる原因は、血管の素材そのものが硬くなる「器質的硬化」と血管が一時的に硬くなる「機能的硬化」があります。器質的硬化は、まず加齢によるものがありますが、それ以外に次のようなものがあります。

◆石灰化

血液中のカルシウムやその吸収を促進するビタミンDが不足すると、副甲状腺ホルモンの働きで、骨からカルシウムが取り出され、血中のカルシウム濃度が上昇します。すると過剰な血中カルシウムが動脈に沈着して、石灰化し動脈硬化が進行します。

※カルシウム摂取が不足すると、逆に血管内にカルシウムが増えるので、「カルシウムパラドックス」と呼ばれています。

◆粥状硬化

血液中の悪玉コレステロール(LDL)や中性脂肪が増えすぎると「脂質異常症」と診断されます。脂質異常で血中の脂質が増えて血液がドロドロになって血管壁にくっつき、血管が詰まると思われていますが、次のようなことが分かっています。

LDLコレステロールの存在自体は、悪くないのですが問題はその量です。血液中に停滞したLDLコレステロールは酸化されると酸化LDLコレステロールとなり、血管内皮細胞の受容体と結びつきます。それをマクロファージは、異物とみなして貪食しますが、その死骸がおかゆ状(粥状)の塊(アテロームまたはプラークともいう)を形成します。それにより血管壁が肥厚して内腔が狭くなり動脈硬化が進行します。

LDLコレステロールが酸化しやすいのは、糖尿病、高血圧、喫煙、慢性炎症などで抗酸化力が低下している場合と言われています。LDLコレステロールが酸化しないような体の状態にすることが、動脈硬化を予防することになります。

※従来、血中コレステロールが高い場合、高コレステロール食品の摂取制限がいられていました。2015年の厚労省の食事摂取基準で、「健常者では食事とコレステロール摂取量に相関関係が認められない」として、この摂取制限は廃止されました。

◆機能的硬化

血管が一時的に硬くなる機能的硬化は、冷えや過労、睡眠不足、喫煙などで交感神経が緊張して血管が収縮し、硬くなるような状態です。器質的硬化と機能的硬化が互いに悪影響を及ぼし、動脈硬化が進行しやすくなります。

■動脈硬化抑制と光線療法

◆石灰化に対して

血中のカルシウム濃度が低下し、カルシウムパラドックスが起きないようにカルシウムやカルシウムの吸収をよくするビタミンDを含む食品(青魚・魚介類など)を多く摂取することが大切です。また、日光浴や光線療法は、ビタミンDを皮膚で産生し、カルシウム代謝を良好にするので、動脈の石灰沈着の抑制に役立ちます。

◆粥状硬化に対して

光線療法は、LDLが酸化しやすくなる糖尿病、高血圧、慢性炎症などの状態を改善し、体の抗酸化力を高めるので、LDLの酸化を抑え、動脈硬化の進行の抑制に役立ちます。

◆機能的硬化に対して

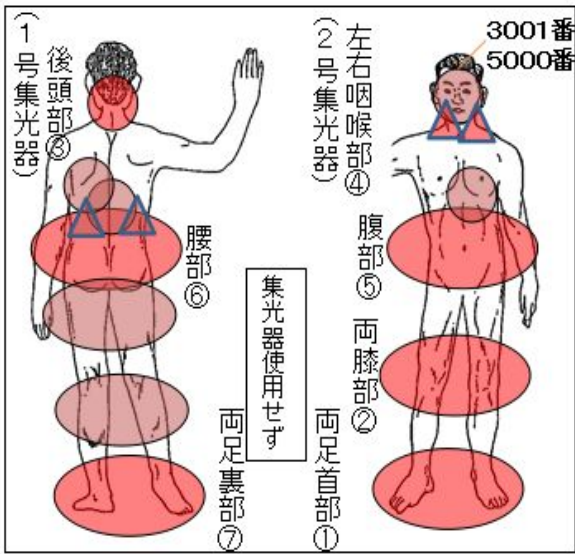
冷えや過労、睡眠不足などで交感神経が緊張し、血管が収縮し硬くなっている状態に対して、光線療法は、冷えを改善し、副交感神経を刺激して、血管を拡張し、緩める方向に作用します。

◆最近注目の物質

動脈硬化を抑制・改善する物質として最近注目されているのが「一酸化窒素(NO)」です。このことを発見したルイス・イグナロ博士らは、1998年にノーベル生理学賞を受賞しています。一酸化窒素は、主に血管の内側にある血管内皮細胞で作られますが、血行を良好にすると血管内皮細胞が刺激され、一酸化窒素の産生を増やします。よってストレッチやウォーキング、入浴などで血行を良好にすることは、一酸化窒素を増やすことにつながります。また、紫外線をあびることで皮膚で一酸化窒素が産生されることがわかっています。日光浴や光線療法で適度に紫外線を浴び、体を温めて血行を良好に保つことは、体内で一酸化窒素を増やすので、動脈硬化抑制と改善に役立ちます。

■ 光線治療方法

◎全身の血行状態を良好にすることが大切：基本部位への光線照射をしっかりと実施



当光線研究所では、動脈硬化の進行度を長年、加速度脈波計という機器で血行状態などを測定し、評価しています。

照射部位(基本部位)
 ・両足裏⑦10分間
 ・両足首部①
 ・両膝②
 ・腹部⑤
 ・腰部⑥
 ・後頭部③
 ・左右咽喉部④ 各5分間。

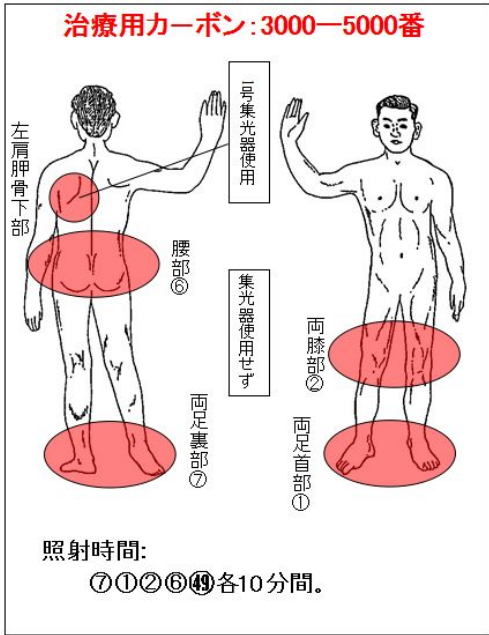
◎治療用カーボン
 ・3000-5000番
 ・5002-5002番
 ・3002-5000番
 ・3001-4008番
 ・1000-5000番等

照射部位(直接照射)
 動脈硬化の進行している部位を適宜追加
 ・眼底の場合：眼部⑯ (3001-5000)
 ・心臓の場合：左肩胛骨下部④⑨、左乳下部⑤⑩
 ・腎臓の場合：背正中部⑲or 左右腎臓部④⑬⑭
 ・閉塞性動脈硬化症の場合：
 腓腹筋部⑲、後大腿部⑳

【治療例1】冠動脈硬化症 83歳 女性 主婦(東京都小平市)

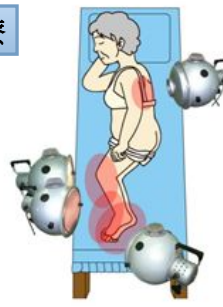
◆症状の経過

- ・74歳時、労作時に動悸・息切れがするので、病院を受診したところ、心臓の冠動脈の動脈硬化を指摘された。
- ・コレステロール値は正常だったが、血圧が高かった。狭心症と高血圧の薬を服用して様子を見ることになった。
- ・光線治療は、子供の頃、中耳炎の治療で使い始め、何か症状があると使っていた。今回、冠動脈硬化症の治療のため、当所を受診し、指導を受けた。



1回目: ⑦①②⑥

当所での治療



2回目: ⑦①②④⑨
各10~15分間

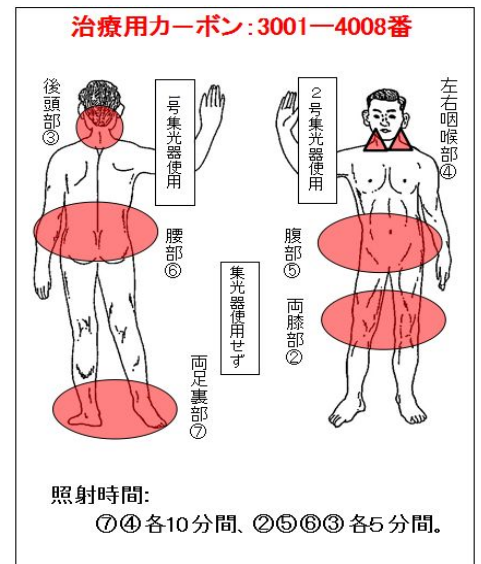
◆治療の経過

自宅で光線治療を続けながら、病院で心臓の定期検査を受けていた。光線治療とともに、血圧も下がり、動悸・息切れもなくなってきた。冠動脈の動脈硬化も進行せず、逆に年々改善しているので、担当医にたいへん驚かされている。現在 83 歳、風邪引くこともなく、膝や腰等痛むところなく、食欲旺盛、よく体を動かして、たいへん元気である。光線治療の力にたいへん感謝している。

【治療例 2】頸動脈狭窄症 86 歳 女性 主婦（神奈川県横浜市）

◆症状の経過

- ・ 60 代より、コレステロールが高めで服薬していたが、それでも高めだった。
- ・ 71 歳のときに乳ガンが見つかり手術を受けた。その後、毎年の検査で異常は無かった。
- ・ 82 歳の時に、軽いめまいがあり検査を受けたところ、ラクナ梗塞と頸動脈の動脈硬化による狭窄を指摘された。
- ・ 光線治療は、60 代から時々使っていたが、今回頸動脈狭窄症の治療指導を受けるために当所を受診した。



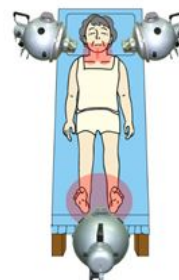
当所での治療



1回目:⑦①⑤⑥



2回目:⑦②⑥③



3回目:⑦④

各10~15分間。

◆治療の経過

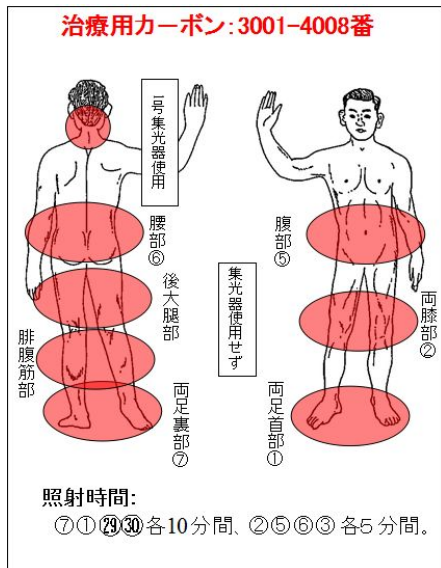
毎年の頸動脈の検査で、プラークが薄くなってきているので、担当医に驚かれた。4年後の現在、頸動脈プラークは、左 1.81→1.6mm、右 1.44→1.1mm に改善している。LDL コレステロールも、基準値よりやや高い位に治まっている。光線治療のおかげで、大変元気に過ごしている。

※頸動脈プラークとは、動脈硬化による頸動脈血管内の盛り上がり。

【治療例 3】閉塞性動脈硬化症術後 91 歳 男性（東京都台東区）

◆症状の経過

- ・ 80 歳のとき、歩行時に左下肢の痛みが強くなり、病院で検査を受けたところ、閉塞性動脈硬化症と診断された。それまで、大きな病気はなかったが、タバコを 1 日 60 本ほど吸っていた。
- ・ 薬物療法を続けたが良くなりならず、人工血管にする手術を受けた。術後、しばらくは良かったが、徐々に歩行時の痛みが再発し、3 年後に人工血管を取り替えたが、症状は全く変わらなかった。150~200m 位で痛みが強くなって、休まないと歩けなかった。83 歳時、親戚に当所を紹介され受診した。



当所での治療



◆治療の経過

親戚に治療器を譲り受け、自宅治療を始めた。治療1か月ほどで、300mほどは痛み無く歩ける様になった。また、閉塞動脈症の術跡の治りが悪かったが、光線治療できれいになり、外科医に驚かれた。その後も順調に回復し、4カ月ほどで1 Km位痛みなく歩ける様になった。さらに光線治療を続けて、下肢の痛みが再発することがなく、毎日1~2 Kmの散歩を日課とした。

90歳を過ぎて外出は減ったが、下肢の痛みはなく、元気に過ごしている。